

ヨーロッパ系オーストラリア人たちとブッシュの自然  
——ネイティブ・プランツの養苗センターAを中心に——

前川真裕子  
(京都産業大学現代社会学部)

はじめに

筆者は 2017 年に新たな研究課題に取り組むべくフィールド調査に出かけた。その調査地はオーストラリアのメルボルンである。この年の 8 月 7 日から 9 月 6 日の 1 ヶ月をメルボルンの友人宅に間借りしながら調査を開始した。メルボルンでの滞在は前回の 2013 年 12 月から数えて 4 年ぶりのことだった。まず筆者はタラマリー空港からスカイバスに乗ってサザンクロス駅で降り、メルボルン大学近くにある友人宅へと移動した。道すがら久しぶりのメルボルンを目にして興奮した。数年間暮らし良く知るはずのメルボルンの街が様変わりしていたのだ。バスにはマイキーと呼ばれる IC カードを事前に購入しなければ乗車することができなくなっていた。新しい地下鉄の駅を 5 つ作るという建設ラッシュも始まっていた。そのうちの一つはメルボルン大学のすぐ近くに作られることになっている。日本企業のダイソー、ユニクロ、無印良品が市内の一等地に店舗を構えるようになっていたことにも驚いた。なんでも手に入り快適な生活がおくれる。メルボルンは 4 年前よりもいっそう世界のどこにでもあるメトロポリスとなってオーストラリアの発展を支えていた。そのオーストラリアは、1770 年にクックがボタニー湾へ降り立ってから、もうすぐ 250 周年の節目をむかえる。ABC のテレビ番組では、この 250 周年を誰の立場からどうとらえるのか、白熱した議論が交わされていた。この国は入植地であったし、今もそうであり続ける。これから数年をかけて筆者が調査を進めていきたいのは、モダンで先進的なオーストラリアと表裏をなす、この 250 年の歩みだ。アボリジナルの出自を持たない住民たちが、入植地としての過去を持つオーストラリアを、どのような土地だと考えているのか？だが、筆者はこれを「植民者／被植民者」という二者択一の問題として取り上げたいのではない。ヨーロッパ系オーストラリア人たちがアボリジナルの人々との関係性を含めつつ、もっと広い意味でオーストラリアという土地をどう認識しているのかを調べたいのである。そこには様々なヨーロッパ系オーストラリア人たちの姿があるだろう。他者の土地を収奪したことに考えをめぐらす人、その土地をすでに自らの故郷として暮らす人、そのどちらにも目を向ける人。そういった人々の姿を入植期から彼らの生活に象徴的な意味を与えてきたブッシュの自然と共に考察していきたい。本調査報告はその第一歩となるもので、上記の少し壮大すぎる研究目的に何かしらの答えを提示できるものではないが、その最初の試みと考えてもらいたい。

## 1. ヨーロッパ系オーストラリア人たちとブッシュの自然

今回、この新たな研究課題に取り組もうと考えるきっかけとなったのは、メルボルンで留学生活をしていた2008年から2012年の間に、同国内で大きく注目を集めていた鯨をめぐる海の自然に興味を持ち始めたことにある。反捕鯨思想が強いオーストラリアでは人々が鯨を含めた海の環境について日常的に語ることは珍しくない。筆者もまた当時のフィールド調査地であったメルボルンで、幾人かの人々から鯨に関する意見を求められた。この時、筆者が気づいたのはオーストラリアの人々が鯨や海の自然について語りながらも、同時に「われわれのオーストラリア」あるいは「われわれオーストラリア人」<sup>1)</sup> にとっての理想的な空間とは何かについて語っていたことである(前川 2017:1-48)。

そういうわけで筆者は、自然を媒介としながら見えてくる「われわれのオーストラリア」や「われわれオーストラリア人」についてもっと深く知りたいと思うようになった。だが実は、筆者が特に注目していきたいと考えたのは海の自然ではない。筆者が注目したいのは、その海の自然よりもずっと同国の人々との関係性が深いブッシュを含む内陸部の自然である。ブッシュとは乾燥したオーストラリアに特有の低木を中心とした草木の茂る土地のことを言う<sup>2)</sup>。それはまたオーストラリアでは同国に独自の自然を表す象徴的な言葉ともなっている。アボリジナルの人々にとって心の拠り所となってきた祖先の物語が継承される場所であり、ヨーロッパ系オーストラリア人たちにとっても彼ら自身の居場所を模索する上で特別な場所となってきた。まず、入植期当初にヨーロッパからやってきた人々にとって、オーストラリアのブッシュは初めて目にする得体の知れない不気味な草木が生い茂る場所だった(前川 2007:20-37)。彼らにとって同国は肥沃な土地と考えられず、乾燥に耐えなければならない荒涼とした場であったのだ。オーストラリアの国民的作家であるヘンリー・ローソンの『羊追いの女房』(1892)には、ヨーロッパからの入植者たちが「過酷で不毛なブッシュ」の自然の中で生活する様子が描かれている。そこに登場する労働者たちは、ブッシュに新たな生活の場を求めつつも、その中で満足な糧を得ることができず、恐怖や不安を抱

---

<sup>1)</sup> ここで意味する「オーストラリア」や「オーストラリア人」とは主に、同国のなかでアングロ・ケルティックやアングロ・ヨーロッパ人と呼ばれる人々である。また、その他にもオーストラリアン・スタディーズの文脈ではしばしば「ホワイト・オーストラリアン」と呼ばれる人々だ。本調査報告では主に「ヨーロッパ系オーストラリア人」と呼びたいと思う。

<sup>2)</sup> オーストラリア英語で意味するところの「ブッシュ」は、イギリス英語やアメリカ英語の「茂み」や「藪」という意味だけではなく、オーストラリアの大陸内陸部そのものを意味するものでもある(有満 2003: 215)。その大陸内陸部はしばしばアウトバックとも呼ばれる。

きながら日々の生活をどうにか乗り切ろうとする人々だ（有満 2003:33-34）。

ヨーロッパ系オーストラリア人たちにとって、オーストラリアに特有のブッシュが長く彼らの理想とする自然とはならなかった一方で、その代わりに彼らは自分たちに馴染みの深いヨーロッパの風景をオーストラリアの中に作り出していった。自然を「飼いならす」という言葉が使われることがあるが、まさにぴったりと当てはまる。ジェーン・ウィリアムズという女性が 1836 年にタスマニアの農業主であったアーチャー家を訪れ書き残したことによると、彼女が目にしたアーチャー家の所有地はイギリスの田園と見間違ふほどに「今まで見たなかでどこよりもイギリス的であった」のだと言う（Boyce 2009: 214）。こういった英国への傾倒は長らく続くことになる。筆者のフィールド調査地の人々も、彼らより前の世代のヨーロッパ系オーストラリア人たちにとって、一般的に好まれたのは薔薇や柳に代表されるような英国的な植物を中心とした自然であったことを話してくれた。それらのヨーロッパに起源をもつ植物を自分たちの身の回り育てることは、彼らよりひと昔前の世代には顕著な傾向であったのだ。

このような傾向に変化がもたらされるのは 1950 年代に入ってからのことだ。この時期に入ると、オーストラリアに独自のユーカリ、バンクシア、ワットル、ティーツリーなど「ネイティブ・プランツ」と呼ばれる植物が注目を集めるようになる（写真 1）。メルボルンのランドスケープ・アーキテクトであったゴードン・フォードらによってこれらの植物たちが町の風景に取り入れられ始めたのだ（Ford 1999）。さらに 1960 年代には「ブッシュ・ガーデン」とも呼ばれるようになっていく（Ford 1999）。しかし、こういったブ



写真 1 ユーカリの一種

ッシュ・ガーデンへの人気はより一般的に高まりを見せ始めるには 1970 年代を待たなければならない（Cerwonka 2004: 111）。1970 年代のオーストラリアと言えば、ウィットラム政権の誕生と共に多文化主義政策へと大きな舵取りが行われるようになった時代であり、同時に英国との植民主義的な関係性が改めて問われるようになった。それはヨーロッパ系のオーストラリア人たちにとって植民地時代から続く「英国的なもの」との繋がりから離れて、「オーストラリア的なもの」とは何かを新たに模索しなければならない時期でもあった。エレイネ・サーウオンカは自身のフィールド調査で行った聞き取りから、1970 年代のブッシュ・ガーデンに対する人々の関心が、この時

代のナショナリズムへの高まりという政治的な背景に関連した活動でもあったことを明らかにしている (Cerwonka 2004:111-112, 125)。また一方でサーウォンカは、現代を生きるヨーロッパ系オーストラリア人たちを調査し、彼らのネイティブ・プランツへの興味が必ずしもナショナリズムを背景にしたものではないことを分析している。彼女はメルボルンにあるガーデン・クラブに通いながら、趣味の園芸を楽しむ女性たちがネイティブ・プランツを含めた身近にある様々な自然をバランス良く楽しんで、ナショナルな空間作りではないヘテロトピックな空間作りをしていることを考察した (Cerwonka 2004: 126-129, 149)。

今回、筆者が調査に訪れた団体も、このような流れの中でネイティブ・プランツの栽培に取り組み始めた人々だ。筆者は今回の調査で同団体の人々を通じて、都市部に住むヨーロッパ系オーストラリア人たちを中心に、ブッシュの自然が 1950 年代から 1970 年代を経た今現在のオーストラリアにおいて、どのような位置付けを与えられているのかを考察したいと考えている。そういうわけで冒頭でも紹介したように、筆者はこの新たな取り組みを始めるため、2017 年の 8 月から 9 月にかけてメルボルンに滞在し第一回目のフィールド調査を行うことにしたのだった。第一回目のフィールド調査では調査地の人々との連絡がうまくいかず、フィールド調査以外の事柄に大幅な時間を費やしてしまった。新しく始めたばかりのフィールド調査では珍しいことではないが、今後の予定している調査に続けていきたいと思う。また、これまで筆者は特に沢山の人が集まり一斉にしゃべるような現場では、それら人々の許可を得て iPod を使いながら音声録音をするようにしてきた。しかし今回は肝心の iPod を友人宅に置き忘れるという失態をしてしまった。それは最も多くの人々が集まると聞いていた三回目の訪問日のことだった。この点についても自戒の念を込めて深く反省したいと思う。

## 2. メルボルンにおけるネイティブ・プランツの広がり

筆者が訪れたのはメルボルンのセントラル・ビジネス・ディストリクトからバスで 30 分ほどのところにある養苗センターである。本調査報告では仮名として「養苗センターA」と呼びたい。この養苗センターA は公共の森林地区内に設置されたもので、誰でも立ち寄ることができる。同森林地区内にはその他にもジョギングコース、フットボールのオーバル、そしてゴルフ場などが併設されており、近隣に住む住民たちの憩いの場所となっている。また森林地区内を大きな川が流れていることもあり、ボートハウスが併設されている。養苗センターA は、最寄りのバス停から歩いて森林地区内に入り、ボートハウスの側を歩いて川の上に架けられた鉄橋を渡る、それから緑の美しいオーバルと呼ばれるフットボールグラウンドの脇を歩いた 25 分ほどの場所にある。この森林地区はもともと 19 世紀末に保護区に指定された土地である。この土地のもともとの所有者はウランジェリなど幾つかの集団に属すアボリジナルの人々で

あるが、彼らが生活したその痕跡を探すことは今では難しくなっている（写真2）。

養苗センターAの責任者はマネージャーのM氏という人物である。今回のフィールド調査では、まずM氏から養苗センターが創設された背景や、彼らの運営の理念などを聞くことにした。その他、養苗センターでボランティア・ワーカーとして働いている計8人の人々から<sup>3)</sup>、それぞれがネイティブ・プランツの栽培や販売そして植付けに係るようになった経緯等を聞くことができた。本調査報告では主にM氏の話を整理していくものとする。M氏はドイツ人とイギリス人の両親を持つオーストラリア生まれの50代の男性である。



写真2 森林地区の風景

1990年代後半からの数年をボランティア・ワーカーとして養苗センターAでの活動に従事し始めた。同養苗センターのマネージャーとして有給の仕事を任されるようになったのは約17年前の2001年からだと言う。養苗センターAにはM氏のような有給で働く少数の人々がいる一方で、ほとんどの人々は近隣に住んでいるボランティア・ワーカーである。

M氏によると、同養苗センターは今から約30年前に創設されたネイティブ・プランツを栽培して販売する団体である。1980年代中頃に「協同組合」としてネイティブ・プランツを広めるために始まった。同養苗センターではビジネスとしてある程度の売り上げは重視されてはいるようだが、協同組合であるためビジネス・オーナーが存在しない。その一方で幾人かの人々からなる「執行力のない非常勤取締役たち」<sup>4)</sup>とM氏が呼ぶ人々によって監督されている。M氏はこれらの人々に毎回2ヶ月ごとの報告書を出して経営状況の詳細を報告している。M氏の同センターでの仕事の7割は事務的な仕事が占めていると言う。得意先にネイティブ・プランツの鉢を配送することもある一方で、M氏が自らその植付けに関わることはない。M氏の役割は主に植え付け前のネイティブ・プランツの選定や育て方についてのコンサルティングにとどまる

<sup>3)</sup> 8人中の1人はそれほど長く話を聞くことができなかった。彼女はちょうどネイティブ・プランツの苗を外部施設の依頼を受けて植えに行くところで、すぐに同養苗センターを出て行ってしまった。彼女によるといつもは近隣の学校などから依頼を受けてネイティブ・プランツを植えに行く仕事を担当しているとのことであった。

<sup>4)</sup> M氏は「Non-executive directors」と呼んでいた。

と言う。またネイティブ・プランツを必要としている近隣の地方自治体担当者と面会することもある。最も大きな取引先はこの地方自治体であり、それは取引全体の7割を占めている。また、その他の得意先として個々の店でネイティブ・プランツを売る小売業者があり、それらの人々からの注文をあらかじめ受け付けて、その注文にあわせたネイティブ・プランツを準備するのだという。それから学校などにもネイティブ・プランツを卸している。売り上げは日本円にして4000万円（1オーストラリア・ドルを80円として計算）になるということだが、M氏によると他の養苗センターと比べると養苗センターAのビジネスは小さなマイクロビジネスで、他のセンターからすればちょうどミディアムサイズの規模であると言う。他の養苗センターは同センターの4倍、5倍、あるいは6倍もの売り上げを出しているところもあるとのことからM氏は自分たちの養苗センターをミディアムサイズの中規模なセンターであると認識していた（写真3）。



ところで、養苗センターAで正式に給料が支払われている人数は9人から10人ほどである。その他

写真3 養苗センターでの販売

はボランティア・ワーカーたちで構成されており、彼らは火曜日、木曜日、金曜日にやってきて任された作業を行うことになっている。それぞれの日には平均して約5人の異なるボランティアたちが働きにくる。3日間で約15人のボランティアたちが毎週手伝いに来る。執行力のない非常勤取締役たちもボランティアとして同センターの手伝いをしている。このように同センターでは、上記で説明したように有給のスタッフであるM氏が苗付けをするということは少なく、実際の作業の多くはボランティア・ワーカーたちによるところが大きい。今回、筆者が訪れたのは春にむけての養苗のシーズンであったが、芽が出たばかりのネイティブ・プランツを小さな黒いポットから、大きめの容器へと移し替えていたのも、近隣から集まったボランティア・ワーカーたちであった。それらの人々は近くから来ている主婦や退職した年配の男性といった面子である。そういった地元の人々が手作業で養苗したネイティブ・プランツの7割が地方自治体へと運ばれていくわけだ。ここから行政と市民が一体となってメルボルンのランドスケープをデザインしていることが見えてくるだろう。ネイティブ・プランツをめぐる活動は、50年代のフォードのようなランドスケープ・アーキテクチャーを

きっかけとし、70年代にブッシュの自然が人気となる流れを受け誕生した養苗センターを經由しながら、現代の市民たちにまで受け継がれる活動となっていることが確認できる。

ところで、M氏が植物の栽培に興味をもったのは祖母の影響からである。M氏の祖母はドイツからの移民であった。M氏は祖母の家を訪れるたびに、祖母が庭で熱心に植物を栽培してはジャムなどを手作りしている様子を見て影響を受けた。祖母の影響を強くうけたM氏は7歳か8歳のころ自宅の庭に「自分のガーデン」を作り始める。特にネイティブ・プランツに興味を持ち始めたのはM氏が10代に入ってからのことであると言う。最初は小売業者として働き、植物とは関係のない職業についていた。その後、M氏はもともと興味があったネイティブ・プランツに関わる職業に転職するため資格を取得することにした。しかしM氏が取得した資格は現在のネイティブ・プランツに関連する資格ほど専門家されたものではなかったようだ。現在ではネイティブ・プランツに関連する様々なコースが充実しているオーストラリアだが、M氏が転職を考えていた当時は現在のオーストラリアならば一般的な「森林保護と土地管理」<sup>5)</sup>と呼ばれるようなコースはなく、そのために特化された専門の知識や資格を取得することができなかった。M氏はもし当時すでに森林保護と土地管理のコースがあったならば、その資格を得るために必ずコースを取って勉強していただろうと残念がっていた。その代わりにM氏はネイティブ・プランツに関する知識をさまざまな書物から独自に習得し、幾つかのブッシュ・ウォーキングの会にも参加するなどして勉強を続けた。

M氏が子供時代を過ごしたのはちょうど1970年代のことであった。オーストラリア社会がネイティブ・プランツへと目を向け始めたその頃である。M氏はそういった70年代のオーストラリアでネイティブ・プランツに関連する様々な団体が生まれたと話す。養苗センターAはそのような社会的背景を受けて創設された団体の一つで、彼によるとオーストラリアでも最も初期の段階で創設された養苗のための団体の一つだ。またM氏はその当時のことをよく覚えていて、それまでのオーストラリアがライフスタイルも含めて極度にイギリスを意識したものであったことを、「イングリッシュ・セントリック(English centric)」という言葉で説明する。もちろん植物に関してもイギリスに由来するバラ、ツバキ、サンザシのようなものが重宝されてきた過去を語った。彼自身は養苗センターAの設立や活動の意義を、ローカルに自生する植物たちがどれだけ有益なものであるかをオーストラリアの「人々に教育してまわる(educate people)」ことにあるのだと指摘し、もっとネイティブ・プランツがオーストラリアの人々の生

---

<sup>5)</sup> 一般的にオーストラリアでは「conservation and land management」と呼ばれることが多い、M氏もそう呼んでいた。

活のなかへと取り入れられていくことを希望しているようであった<sup>6)</sup>。

さらに M 氏はネイティブ・プランツの仕事へと関わり始めるいたった彼自身の経緯を話しながら次のようなことを語った。以下で M 氏が使っている「バイオダイバーシティ」という言葉は一般的に多様な生物が共存できる自然環境、つまり生物多様性のことを意味する。オーストラリアでは近年とても注目されている言葉で、様々に異なる動植物の種が絶えることなく維持されること目指すものである。

オーストラリアの植物だけに興味を持ってきたわけではなく、自分が興味を持ってきたのはもっと広くバイオダイバーシティに関連することだ...他の生き物たちと...植物の関係性...それは同時に人との関係性でもある<sup>7)</sup>。(2017年8月23日早朝)

ネイティブ・プランツにのみ関心があるわけではないという彼は、確かに自宅の庭では様々な種類の植物を育てている。ネイティブ・プランツ以外にも様々な植物が育つその庭を、彼の娘は「めちゃくちゃ」<sup>8)</sup>と呼んでいるという。

また一方で、M 氏はバイオダイバーシティに興味を抱きつつも、「手つかずの自然」にも関心を寄せているようだった。子供時代に通ったというメルボルンの中心地から少し離れた自然豊かな郊外をそういった手つかずの自然と位置付けていた。彼はそういう場所のことを「カントリー」と呼ぶ。オーストラリアではアボリジナルの人々を含め、様々な人々の間でよく使われる言葉で、「故郷」という意味合いで用いられる。M 氏はそのカントリーの自然を人の手が及んでいない「手つかずの自然」であると言い特別な思いがあるようだった。

自然な環境というものこそ最も好きなものなんだ。子供の時よくカントリーのほうへと出かけて行ったよ、特にそのままの自然が残る地域にだ。そのままの自然っていうのはつまり、人の手が入っていないってことだ。そう、とてもピュアなこと。<sup>9)</sup> (2017年8月23日早朝)

---

<sup>6)</sup> ネイティブ・プランツを取り入れることを M 氏は「embrace」という言葉で言い表した。

<sup>7)</sup> M 氏は英語で次のように語った。‘Not just look at Australian plants, but it’s just...it’s more about connection to biodiversity...other animals...their relationship with plants, but also there is relationships with people too...’

<sup>8)</sup> M 氏は英語で‘messy’と語った。

<sup>9)</sup> M 氏は英語で次のように語った。‘Natural environment what I love most...As a child, I used going out to the country and especially pristine subarea...pristine as in untouched...yea pretty much pure...’



M氏がイングリッシュ・セントリックな生活や自然との結びつきから距離を取り、オーストラリアに独自の自然を特別に感じているあたりは、70年代の人々の活動にも通じるところがあるように思われる。だが、M氏はそれだけではなく、「バイオダイバーシティ」や「手つかずの自然」<sup>10)</sup>にも興味をもっていた。特に、彼の語りから伺えるバイオダイバーシティという言葉には、オーストラリアのネイティブ・プランツにだけ目を向けているのではない、さらに広い視野で様々な自然を考慮に入れている姿がみてとれるのではないだろうか。また興味深いのは、M氏が自分たちの活動を70年代の人々の活動とは差異化しているところだ。M氏がいうところでは70年代の人々は「とにかくオーストラリアの植物」であればなんでも興味を持って生活の中に取り入れていたという。しかし、現代のM氏のような活動に従事する人々にとって、ネイティブ・プランツであればなんでも良いというわけではない。それぞれの地域には独自の自然環境があり、その自然環境に適したネイティブ・プランツが育つ。そのネイティブ・プランツはもちろん州によっても異なる種類が存在するし、同じ州内であっても南と北とは異なる。重要なのはそれが「オーストラリアに独自の」ということではなく、その地域に根ざした「ローカルな特色(local character)」であることなのだと言うのだ。M氏は他にも「ローカルな風味(local flavour)」という表現をしながらメルボルンらしい自然について話し、現在の養苗センターAの仕事をメルボルンという地域ならではのネイティブ・プランツを栽培し販売することにあるとしている。彼はそれが「メルボルンらしさ(Melbourne-ness)」を自然環境から作っていくことなのだと語った。このことを先述のバイオダイバーシティという言葉と照らし合わせるならば、M氏の理想とするのはメルボルンという地域的に特徴のある多様な生態系を保つことであり、彼がカントリーと呼ぶ昔からメルボルンに残るそのままの自然を維持することである。彼が言うようにバイオダイバーシティがオーストラリアに独自の植物だけでなく、且つ人間や他の生き物を含む大きな概念であるとするならば、ネイティブ・プランツを通してメルボルンらしさをデザインしようとする彼の活動には、70年代のナショナリズムを背景にオーストラリアの独自性を追求しようとした活動にはない、ナショナルな枠組みを超えた生物多様性の中の一点としてのメルボルンが反映されているのである。そこにはオーストラリアという枠組みよりも、もう少し広い地球規模の視点を取り入れられているのではないだろうか。

---

<sup>10)</sup> この「手つかずの自然」にみられる自然観はオーストラリアではめずらしいものではない。特に、ディープ・エコロジーといった概念と共に広まってきたものである。環境主義運動がオーストラリアで盛んになった1980年代から、様々な場面で用いられるようになってきた。この「手つかずの自然」については改めて別の機会に論じたいと思うが、オーストラリアの反捕鯨思想に関する拙論（前川 2017:21）に簡単な説明があるので、そちらを参照のこと。

### 3. 本調査の考察と今後の計画

本報告では主に養苗センターAのM氏について取り上げた。今後は第一回目調査で話しを聞くことができた他のボランティア・ワーカーたちについても詳細を分析していきたいと思う。また、第二回目のフィールド調査は2018年3月に11日間の旅程で行う予定である。この第二回目の調査では、第一回目の調査でボランティア・ワーカーの女性Bからあがった「知恵の共有」という言葉に改めて注目していきたいと考えている。このボランティア・ワーカーの女性Bは、普段は近隣の学校などにネイティブ・プランツを植え付けに行っている女性である。その彼女は「ブッシュ・フード」とよばれる食べ物について、教育機関に簡単な紹介をしているようでもあった。ブッシュ・フードとは人が口にして食べることができるネイティブ・プランツのことを言う。もともとアボリジナルの人々が利用してきたブッシュの恵みのことを指し、ブッシュ・タッカーとも呼ばれている。彼女はブッシュ・フードを子供たちに教え広めていくことを知恵の共有という言葉で話した。第一回目の調査では女性Bは忙しく仕事をしている最中で長く話すことができなかった。第二回目の調査時には彼女の言う知恵の共有が何を意味するのか詳細を確かめたい。だが、おそらく筆者が予想するところでは、アボリジナルの人々が培ってきた土地に関する知識を、次世代のオーストラリアで生きる子供たち一般に伝えていくということの意味していたのではないかと考えている。確かに近年のオーストラリアではブッシュ・フードへの関心が高まっており、教育機関などでの取り組みが始まっているようだ。

また筆者は今後さらに本研究を進めるにあたって、オーストラリアン・スタディーズの文脈で議論が深められている「ホワイトネス」という概念と共に分析をおこなっていきたいと考えている。冒頭でも紹介したようにオーストラリアは入植地としての歴史を持つ国である。ヨーロッパからやってきた人々はアボリジナルの人々を虐げた上に白いオーストラリアを作ってきた。そして彼らは、もともと他者の土地であったオーストラリアを自らの故郷とする際に、周囲に広がるブッシュの自然をさまざまに飼いなしながらオーストラリアという土地と自分たちとの関係性を築いてきたのである。アボリジナルの人々にとって土地や自然との関わりが自らのアボリジナリティを形成する一つとなるように、外からやってきたヨーロッパ系オーストラリア人たちにとっても土地や自然との関わりはオーストラリアと自分たちを結びつける大事な繋がりの一つとなってきた。このことから筆者は、ネイティブ・プランツにまつわる活動に従事する人々の姿を考察しながら、アボリジナルの出自を持たない彼らヨーロッパ系の人々が、現代のポストコロニアルなオーストラリアと結ぼうとしている関係性について調べていきたいと考えている。筆者はこの試みを自然を媒介に考察されるホワイトネス研究であると位置付けていきたい。

〈日本語参考文献〉

有満保江

2003 『オーストラリアのアイデンティティ：文学にみるその模索と変容』東京：東京大学出版会。

前川真裕子

2017 「オーストラリアの反捕鯨思想と人々の考える『理想的なオーストラリア』」国立民族学博物館研究報告 42 (1): 1-48.

2007 「近代の視座とマルティカルチュラル・オリエンタリズム：ポストコロニアル理論をめぐる新たな展開のために」（神戸大学修士論文）。

〈英語参考文献〉

Boyce, J

2009 *Van Diemen's Land: A History*. Melbourne: Black Inc.

Cerwonka, A

2004 *Native to the Nation: Disciplining Landscapes and Bodies in Australia*. Minneapolis and London: University of Minnesota Press.

Ford, G

1999 *Gordon Ford: The natural Australian garden*. Victoria: Bloomings Books.